

愛媛大学教育学部

第128号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番
愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp

開学七十周年



高橋 治郎

愛媛大学教育学部
同窓会会長



同窓生の皆様、お変わりございませんでしょうか。お元氣にご活躍のことと拝察いたします。大学では、平成三十年度の卒業式と修了式、平成三十一年度の入学式が無事、終わりました。教育学部の卒業生は二百四十一名、大学院修了生は五十一名でした（来年から、卒業生の数が七十名程減）。そして四月の今、桜が咲きほこり大学内は三月とはうって変わって、賑やかに、生協食堂は大混雑しています。

三つの元号を生きることになります。「明治は遠くなりにけり」と言われたように、「大正」の前「明治」は大昔のように思っています。が、今度は、「令和」生まれの若者から「昭和は遠くなりにけり」と言われることでしょうか。

さて、愛媛大学の開学が昭和二十四年ですから今年、七十周年ということになります。十一月十一日が開学記念日ですので、一並びで、平成十一年十一月十一日に「開学五十周年」のお祝いをし、今年、令和元年十一月十一日には七十周年を迎えます。もともと教育学部の前身は愛媛県師範学校で明治九年に開校しています。何年前かというところ（こういう場合元号は不便）、明治九年は一八七六年です。今年二〇一九年から引いて、一四三、一四三年前ということになります。歴史に「もし」はないのですが、愛媛県師範学校が明治九年より前に開学していたら、秋山好古は大阪へ行かなくてすんだのですが……。そうしたら、歴史は変わっていたでしょう。

今、時間がたつぷりあり、朝ゆつくりできますので、断続的にしか観ていなかった連続テレビ小説「おしん」（昭和五十八年四月

から一年間）の再放送を見ていますが、子守をしているおしんが小学校へ行き、窓越しに黒板に書かれている文字を教室の子供たちが読むのを見て口ずさむシーンがありました。さらに、教師の働きかけで子守をしながら教室で勉強できることになり、昼食抜きという女中頭の言いつけにもめげず、がんばるおしんの「向学心」に涙しました。また、奉公に出したおしんの母親が「ひらがなでも学んでいたらおしんに手紙を書いてやるの」と子を思う、父親との会話がありました。明治時代には学校へ行きたくても行けない子供が、そして読み書きのできない大人が大勢いたのです。百年ちよつと前なのですが。

明治から大正、そして昭和と学校制度が整備され、戦後の昭和二十四年には各都道府県に大学が置かれ、「駅弁大学」と揶揄されながらも今年で七十年、人間でいえば古希を迎えたわけです。愛媛大学教育学部は、前に述べましたように、明治九年から教員を養成してきました。この間、三万五千八百八十一名の卒業生と千百十一の院生を送り出しています。そして、卒業生、修了生の多くは教師として日本国内はもとより、海外においても次世代を担う青少年の教育に従事してきました。その結果、豊かな生活ができる社会が構築されてきたのはご承知のとおりです。

しかし、教育は時代時代の為政者の思想を実現させるための道具として利用され、軍国主義を支えるための、あるいは安い労働力を担う人材養成のために使われてもきました。子供たちに「ゆとり」がないから、「ゆとり」のある学習をと進められてきた学習内容の軽減も、上級学校、難関学校に行くには「ゆとり教育」などと言っておれないとばかりに、学習内容を元に戻し、それにさらに内容をプラスしたものをあてがひ、教科書はポリリウムのある重たいものになっています。これでは、年間の休日が多くなっている昨今、土曜日も含む休日にも授業をしないと教えきれません。児童生徒にとつても学校だけでは理解できず、塾で勉強せざるを得なくなっており、夜遅くまで勉強しています。一方、運動部の生徒諸君は、夕暮れを過ぎても部活で汗を流し、クタクタになって家に帰り、それから予習・復習をするのですから文武両道も大変です。

最近では、教育費が膨らみ、お金がないと上級学校に行けなくなってきました。奨学金制度も改悪され、私たちの頃のように大学の授業料月千円（年間一万二千元）で、奨学金が八千円、そして何年か就職に就けば奨学金の返済免除という時代ではなくなりました。こうした教育環境の悪化もあって、教員志望者が減少しています。教員養成学部は、大切です。これからは母校教育学部への物心両面からのご支援、ご援助をいただければと思います。どうぞよろしくお願ひします。

表紙

「吉祥文具須絵大皿」……相澤このみ
題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫
「開学七十周年」……………(1)
教育学部同窓会会長 高橋 治郎

心 響

「創る」
松山市・姫山小学校校長 渡邊 恵理

研究室紹介

特別支援教育講座 「吉松靖文」研究室
教育学部生が小規模校の教育を学ぶ！ 上島町立弓削小学校・生名小学校を訪問

職場だより

・韓国・順天郷大学からの幼児教育に関する参観団来訪
・教育学部留学生歓迎会を開催しました
「学びの道はなおも奥」
四国中央市・土居中教頭 渡部振一郎
「教員一年生を終えて」
西条市・壬生川小教諭 工藤 壮樹
「教師のやりがい」
上島町・岩城小教諭 菅 将太郎
「仕事も人生も楽しむ」
大洲市・長浜中教諭 前田 麻里
「ただいま、八幡浜市」
八幡浜市・神山小教諭 二宮 章紘



創 る



松山市
姫山小学校校長

渡邊 恵理

(昭五九卒)

【子どもたちが創る学校】

四月、入学式が終わると本格的に新一年生の学校生活がスタートします。一年生にとっては、全てが初めてのことで、慣れるまでの数日間はドキドキです。

登校指導を終わらせて、一年生教室に行ってみると、何とロッカーの中にきちんとランドセルが収まっているではないですか。驚いて、周りの様子を見てみると、その理由が見えてきました。通学班長の力です。通学班の班長が、学校に到着後、一緒に一年生教室まで来て、机の中に教科書等を入れたり、ロッカーにランドセルを片付けたりする方法を教えているのです。その教え方の見事なこと。優しく穏やかに見守り、一年生が困ると、優しく言葉を掛け、ちょっと手を貸し……。大人は、これができるのです。子どもが困っていたりうまくできなかったりすると、「こうするのよ。」と言わんばかりに、大人の手でやってしまうのです。たくさんの言葉で説明しながら。

この通学班の班長たちの様子に

感動し、少し学校の様子を観察してみました。雨の日の登校時。傘の始末に悪戦苦闘している一年生に、玄關掃除をしていた六年生がそっと近付いて寄り添い、ほんの少し、傘の閉じ方、丸め方、傘立てへの入れ方を教えていました。給食後のエプロン畳みを手伝う六年生も同様です。誰が指示したわけでもありませんが、「やってあげる」ではなく、「できるよように手伝う」という姿勢が見られたのです。

高学年が、下学年を思いやり優しく行動できる子どもに育っていることは、大変うれしいことです。同時に私たち大人は、この高学年を見習って、指示するのではなく、一つ一つの場面で子どもたちが自分で考えて行動することができる支援の仕方を、今一度見直す必要があるとも感じました。

「廊下を走ると危ないよ。」「トイレのスリッパを整えておくと、次の人が履きやすいよ。」学校のマナーを子どもたちが互いに伝え合い、言葉を交わす学校になれば、本当の意味で笑顔があふれる学校、安全で秩序のある学校になるのでしょうか。もっと言えば、自分たちはどんな学校がいいのか、自分たちの学校をよりよくするためには何ができるのかを子どもたち自身で考えて行動し、自分たちが誇れる学校を創ってほしいとも願っています。「子どもたちに任せてみよう」と思う一場面でした。



【地域とともに創る学校】

現任校は、地域とのつながりが強い学校です。新年度が始まり一年生が早く下校するとき、たくさんの方々が学校まで下校の見守りのために来てくださいます。「子どもたちと一緒にいると楽しい。」「子どもたちから元気をもらっている。」と言われ、最後の子が保護者に出会うまで一緒に歩いてくださいます。いろいろな話をしながら。

年間をみても、毎日の登下校の見守りをはじめ、さまざまな学習に参加していただきます。一年生とは昔の遊び、二年生とは野菜作り、三年生とは昔のくらし学習、四年生とは防災学習や福祉学習、五年生とは米作り学習、六年生とは平和学習。おかげさまで、有意義で楽しい学習を展開することができています。

「地域」の環境や文化、歴史、

人は、子どもたちの発達に大きく影響しますし、生きた学びの場でもあります。「地域」の教育力を生かすことで、学校の教育活動が活性化するとと言っても過言ではありません。学校で「元氣よく挨拶をしましょう。」と言うより、地域の中で出会った人たちと挨拶をして会話を弾ませる方が自然であり、人と関わる喜びを感じ取ることができます。授業で出会った地域の方を覚えて、地域の中で自分から声を掛ける子がいると聞きます。子どもが少ない地域の方が、近所の公園に遊びに来てほしいと呼び掛けると、数名の子が遊びに来て、歌声まで聴こえるようになったと学校に報告にいられた方もいます。

「地域」と「学校」がつながる意味は、子どもの教育に加えて、同じ場所に住む子どもと大人のコミュニケーションによって「地域」への愛着を深め、地域文化の継承者として人が育っていくという点もあるのです。

すばらしい能力をもったロボットの開発や、夢であった宇宙旅行が現実になるのは、そう遠いことではありません。それは、人類にとっては輝かしい未来です。そのような未来社会においても、多様な人との関わりの中で豊かな心が育まれ、人との協働により社会は創造されるということを子どもたちには忘れないでほしいと願っています。

「子どもをまるごと受け止める」
愛媛大学教育学部附属小教諭 濱田 圭

国際理解教育コースを終えるに際して
―愛にあふれた大同窓会―…………… (13)
国際理解教育コース 白石 人巳

国際理解教育コースの思い出
わたしの国際理解教育コース…………… (14)
国際理解教育コース 松原 咲子

原稿募集…………… (13)

先輩を偲ぶ…………… (15)

「あしあと(2)」
過去から現在そして未来へ

会員の声…………… (17)
「遠く宿縁を慶べ」
「教行信証」の序より(Part 2)
吉原 宏文

表紙作品…………… (18)
「吉祥文具須絵大皿」について…………… (18)

放送大学案内…………… (19)

ミュージアム案内…………… (19)

部活動紹介…………… (20)

TRUSTARS
(愛媛大学チアリーディング部)
免許法認定通信教育講座案内…………… (21)

同窓会支部長会報告…………… (22)

愛媛大学教育学部同窓会会則
事業・決算報告
役員表
寄付者名…………… (26)

裏表紙…………… (27)



研究室紹介

愛媛大学教育学部

特別支援教育講座



教授 吉松 靖文 先生

九州出身の私が愛媛に来て二五年になろうとしています。大学では心理学を専攻する一方で、自閉症児や肢体不自由児のためのポランティアをやっていたものの、私の関心は、自閉症を治したいというようなどころにはなく、自閉症とはなにかという問題でした。当時、既に自閉症に対するいくつかの療育技法が乱立し、どれが有効なのか互いの立場からせめぎ合っていた時代です。そんな中、それぞれの療育技法の理論や技法について関心を持って学びはしましたが、私の関心は自閉症の本態とはなにかということでした。

そんな私が愛媛大学教育学部という子どもたちを教育する教員を養成するところに赴任した際は、ある種の違和感をもっていただけに記憶しています。当時、障害児教育という分野はまだ平均から外れた子どもを平均に近づけるといふ雰囲気はどこかで感じていたからです。

しかし、赴任するとすぐに、愛媛県内の療育や学校教育の現場にかかわるようになりました。そして、それらの現場で抱える子どもや保護者、教師、周りの人たちが抱える問題に直面することになりました。元々、自閉症を始め障が

い児を治そうという気がない私に、現場は、治すことを求めて来ることに戸惑いつつ、その要求にどう答えるかという日々だったように思います。

しかし、現場の先生方と接する内に気づいたのは、当然といえば当然なのですが、彼らは子どもたちによりよく育ってほしいという熱意を持って日々の教育支援にあたっているということでした。子どもがよりよく育つとはどういうことか、私は愛媛の先生方から学んだように思うのです。

現在、私の研究室で最も大切にしていることは、子どもの特性をいかすこと、子どもとともに目標を考えその達成のためにをしたらよいか計画・実行することです。こんな自分でよかったと思える研究といってもよいでしょう。

これまで、学部生や大学院生がこのポリシーの元、様々な実践を行ってくれました。そのいくつかを紹介します。

ある小学生が特別支援学級に在籍していました。この子どもは、極めてマイペースで自分のしたい

ことかしないという子どもでした。たまたま、この子どものクラスに実習に行っていた学生が卒論を書くにあたってこの子どもを対象に私について研究をしたいと言ってきたのです。面白い学生だなと思い引き受けました。

学生にいつたいなにをしたいのかと尋ねてみると、この子どもは周りの子どもたちに理解され、みんなから好かれているのだが、この子どもの良さ・面白さが周りに伝わっていないと思うと言いました。とても、面白い視点です。では、どうしたら良さ・面白さが伝わると思うかと尋ねると、それはわからないという答えでした。では、その子どものが良さで面白さなのかを尋ねると、生き物に対する興味・関心が強いということでした。だったらその子どもと一緒に生き物の図鑑を作って、交流を行って通常の学級の子どもたちに読んでもらうてはどうかという話になりました。先にも書いたように自分のしたいことかしない子どもなので、生き物の図鑑作りという自分の好きなことに夢

中になってくれました。図鑑を作るだけでは一方通行なので、図鑑の中にクイズコーナーを設け、通常の学級の子どもたちにそれを解いてもらうことにしました。通常の学級の子どもが図鑑とクイズを通して教えられ、特別支援学級の子どもが教えるといういわばふつうとは逆の関係を作ってみたのです。

子どもたちの間に関係性の変化が生まれてきました。それまで、通常の学級の子どもたちはこの子どもをちょっと変わっているけどやさしくしてあげたい対象として見ていました。なので、本人が得意なこととは周りの子どもが積極的に手伝ってあげたり本人の代わりにやってあげたりしていました。ところが、図鑑作りを通して、通常の学級の子どもたちは、できないことがたくさんあり、やさしくしてあげるべき障がい児ではなく、みんな（定型発達）とは違う面白い世界をもった人という認識に変わっていったのです。

障がいがある人たちへの優しさ、動もすると定型発達者が上で

障がい者が下であるという上から目線になりがちではないでしょうか。私自身、障がいを治す気がないといいつつ、どこかで上から目線になってた自分に気づくことがあります。みんなと同じことができないということは、見方を変えれば、みんなと違うことができるということと言えるでしょう。であれば、その違いをいかせないところが障がいなのです。

そのような観点から幼稚園・保育園、小学校、特別支援学校などで、「ふつうのこと」ができない子どもだからできる「ふつうじゃないこと」をみつけていかす実践を行ってきました。

教室には入れない幼稚園児がたまたま描いていた絵がとても面白かったので絵本作りをしてもらったところ、教室に入らないまま、みんなの人気者になって活躍したことがあります。対人関係が難しい子どもだったのでですが、発想力が非常に豊かで、そのうち本人だけで手が回らなくなり、クラスの子どもたちに指示を出して仲間とひとりでは作れない大きなおも

ちゃを作るなどしてみんなの遊びを豊かに発展させてくれました。この子どもが卒園したとき、残った子どもたちや先生たちは、しばらくなにして遊んだらいいかわからない状態に陥るくらい影響力を発揮していました。

また、特別支援学級の子どもたちにも、通常の学級の子どもたちよりもあまり勉強が得意でないので、楽しく教えてあげてほしいと頼んだところ、教科に関するクイズやお菓子を作ってお楽しみ会を開いてくれました。招待された通常の学級の子どもたちは、それを楽しんでただけでなく、その教科に興味を持ち始めました。そこで、その教科の図鑑を特別支援学級の子どもに作ってもらい、通常の学級の子どもたちにも読んでもらったところ、これらの活動を行う前と後ではテストの成績に上昇が見られました。

最近では、交流・共同学習とあって、障がいのある子どもと障がいのない子どもが互いの良さを知り合う交流だけでなく、共同による教科等の学びが重視されてい

ます。そこで、交流・共同学習に行きたくない特別支援学級の子どもにも、交流・共同学習を行いたい教科等を決めてもらい、通常の学級の中で達成すべきミッション（目標）を本人と決めて達成できたかどうかをともに評価してみたところ、本人から交流・共同学習の回数を増やすという行動が見られました。

以上、私の研究室でこれまで行った実践事例の一部をご紹介しますが、これらの事例から私が学んだのは、人間はみんな活躍・貢献したいのだということです。障がいや理由に活躍・貢献できない人たちがまだまだ存在しています。周りの人たちも、障がいというなにかができないという側面に気をとられ、障がいがあるからこ

そでできることに目が向きにくいものです。教員養成に携わる仕事をしているからこそ、障がいをいかにせる学生を養成し、教員として活躍してくれることを願っています。

◇ 吉松先生の活動紹介 ◇

【特別支援学校長として】

先生は本年三月まで愛媛大学教育学部附属特別支援学校長として四年間六十名の児童生徒を見守ってくれました。

運動会、学校祭、お別れ会、卒業式などでは、いつも児童生徒目線で、一人ひとりに声をかけて励ましてくれました。



卒業生を励ます
吉松先生

全校の児童生徒が集まる全校集会やお別れ会ではいつも分かりやすいことばで話をしてくれました。



お別れ会で児童生徒に
挨拶する吉松先生

また、教職員には児童生徒への関わり方について、その場その場で具体的なアドバイスをいただき、先生が校長室に来ている日は頼もしい限りでした。

【研究活動等として】
先生は、愛媛大学教育学部学校教育支援のための教員の一人として

OLD、ADHD、高機能自閉症等の学習・行動に著しいつまずきを抱える児童生徒に関する特性や支援法についての解説・相談。

○通常の学級で特別支援教育をいかし、すべての子どもへの学習・行動の改善・向上や集団作り・学級づくりの具体的なアイデアを紹介

○障害者差別解消法で義務づけられた合理的配慮の提供のポイント、注意点などの話。

○障害者差別解消法で義務づけられた合理的配慮の提供に関する個別相談などについての相談活動や講演活動を県内外で行っています。



研究会で助言をする
吉松先生

- 正しい方法でできる：発達
- 嫌でもやらないといけないことがある：
本来の意味での「しつけ」とは
- ・生活意欲・働く意欲
- 生活単元学習・作業学習



講演をする吉松先生

こうした先生の活動に現場の先生方や保護者の方は信頼をおき、頼りにしています。



韓国・順天郷大学からの幼児教育に関する参観団来訪 【12月16日(日)～20日(木)】



2018年12月16日～20日、教育学部と学部間学術交流協定を締結している韓国・順天郷大学から先方の幼児教育専修のKwon教授、院生1名、学部生16名が来訪しました（総勢18名）。16日は愛媛大学教育学部の学生で順天郷大学へ派遣された者と一緒に道後温泉周辺を散歩。17日は附属幼稚園、18日は石井幼稚園の参観を行いました。19日は深田昭三教授の講義を日韓通訳者を介して聞く機会を設けました。滞在期間中、愛媛大学教育学部の幼児教育専修の学生さんとの交流の時間を設け、本学部の学生さんにとっても意義深い国際交流の機会となりました。



道後温泉前にて記念写真



松山市立石井幼稚園にて園の説明を聞く



教育学部留学生歓迎会を開催しました 【4月23日(火)】



平成31年4月23日(火)、教育学部本館2階会議室で、教育学部留学生歓迎会（前学期）を開催しました。教育学部では、今年度4月から新たに4人の留学生を迎え、現在7人の留学生が在籍しています。歓迎会には、留学生、教育学部長、指導教員、国際交流委員会委員、留学生チューター、事務職員などが一同に集いました。

国際交流委員会副委員長の富田英司准教授の司会のもと、佐野栄教育学部長の歓迎挨拶があり、乾杯でパーティが始まりました。その後、留学生が紹介され、それぞれ日本語で自己紹介を行いました。歓談を通して交流が行われ、和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができました。留学生の皆さんにとって、本学で過ごす留学生活が有意義なものになるよう願っています。



職場だより



学びの道はなおも奥



四国中央市
土居中教頭
渡部 振一郎
(平元卒)

地元である東温市川内町を離れて丸三十年が過ぎた。七年前は人生の半分を、この四国中央市で過ごしたという感慨に耽ったものだが、今度は自分自身の教員人生の残りを数えられるような年齢となってきた。(まだまだ不確定要素はたくさんありますが……) まだ、自分の人生を総括する年でもないが、今回の寄稿にあたり、振り返りを行ってみようと考えた。

そもそもなぜ教員を目指したかという点、他の先生方のように高尚な希望もなく、自分の適性としては機械やパソコン相手にする仕事よりも対人の方が向いていると感じたからである。また、部活動指導、特にラグビー競技の指導をしてみたかったことも大きな理由の一つである。それなら高等学

校を受けるべきであるというご指摘は、まさにその通りである。教員採用試験を受けるに当たり、一番の悩みがそこであった。中学ラグビーは愛媛県内には愛光のみであった。しかし、高校まで理系であった小生は社会科の専門知識においてもいささかの不安があったのである。

以上のようないきさつがあり、中学校の教員となって赴任した先が、当時の「伊予三島市立南中学校」であった。同じ愛媛県内であっても、地縁も血縁もない東の端に赴任して、右を向いても左を向いても知らない人ばかりである。また、方言についても話尾に「な」がつく。中予から来た人間にとっては、強い命令形として聞こえたことをよく憶えている。(発言者個人のパーソナリティも加味されたのだらうが……)

現場に立つと、やらなければならぬ事務処理の量の多さに圧倒され、常に後手後手に回った記憶しかない。教員生活の最初の七年間はバレー部・サッカー部・女子テニス部等、若くて体が動くのだからと様々な部活動の指導に携わるチャンスをいただいた。その時

は、専門的な知識がなく、どうにか子どもたちのスキルアップのために「使えるものは何でも使う」が座右の銘であった。しかし、今となって思うと、その間の学ぶ姿勢や、自分の力だけでは足りないチーム作りや様々なスポーツの多様性などを学ぶ時間であったのだと感じられるようになってきた。自分自身のコーチングの視野が広がったのは他のスポーツと関わったからなのだと確信した。

そこから、二十年間余り、念願のラグビーの指導に携わることができたのは、幸せなことだったと感じる。最初の頃は部員数も数名であり、部活動としては大会参加が出来なかったため、社会体育としても「宇摩ジュニアラグビースクール」として、学校以外のラグビーをやりたい中学生に対して門戸を開いて、現在も活動を続けている。新居浜市・西条市・池田町などから子どもが練習に参加することがあった。

若さとは直情的であり、感性としてはすばらしい部分も持ち合わせているが、逆に「勝つこと」が優先順位の圧倒的な上位となり、逆に子供たちの可能性の芽を摘み取ったことも多々経験した。

一昨年の「愛媛国体」を機に、最前線での指導から、チームマネジメントに関わる立場となった。そのために、自分自身の経験によ

る反省を含め、チームコンセプトを明確にして、目指すべき方向性を示し、それに対して、評価を行うようにした。以下に示す内容が弊チームのチームコンセプトである。ご参考までに提示する。

① ラグビーのスピリットでもあるノーサイドの精神や「LONG FOR ALL ALL FOR ONE」の精神など、自己犠牲や感謝の気持ち等の精神を養い、人間育成をすることを目的とした上に、スポーツの勝つ喜びを学ぶ。

② また、他のスポーツにない「コインタクトプレー」を行うことで、現在の子ども社会で希薄になってきた忍耐力や責任感を学ぶ絶好の機会であると考ええる。

③ すべてのスポーツの中で、最も人数の多い競技であり、そのために、様々な個性の生かせる競技でもある。その中で、仲間とつながり、判断力を養う。

④ 上記の要素の中で、もてる力を総動員して闘う球技であり、そのために我慢や努力することを通じて、失敗しても立ち上がり、立ち向かっていく意志を育てる。(たくましさ)

勝つことにプライオリティーを置かなくなつてから(スポーツの本質として上位にはありません)

長くラグビーに関わる教え子が増えたように感じます。レフリーとして・プレーヤーとして・マツチドクターとして・指導者として・サポーターとして……。様々な立場で「ラグビーを楽しむ」「ラグビーを通じてコミュニケーションができる」四国中央市になりつつあると感じる。これからは次の世代の活躍を見守る立場だと感じた。

その中で、三つうれしいニュースを報告する。一つめは「トップリーガー」としてプロ選手で活躍する教え子が三十歳目前にも現役続行していること。二つめは「三島クラブ」が四国内のチームとして初の全国クラブ選手権に出場したこと。三つめは、関東や関西の大学で「一本目」を目指して努力していることである。

現在の勤務校である四国中央市土居中学校の校歌は地元の白木豊さん作詞(土居町小富士村出身、大東文化大学事務局長兼教授)の二番の歌詞に

「文化の泉 御井の真清水 こんこんわきでる 力もわきでる 文化の進歩は肩の上 若い命の血潮が燃える 学びの道はなおも奥 新たな力がわき起こる ああわが学び舎 土居 土居 土居中」

目指せば目指すほど、先が見えなくなる。しかし、その先にこそ真理がある。「学びの道はなおも奥」

教員一年生を終えて



西条市
壬生川小教諭
工藤 壮樹
(平三〇卒)

私が教員を目指すようになったのは、高校一年生の時でした。進路選択に悩んでいた際、父親が高校の教員、祖父母が小学校の教員をしていたことが一番初めのきっかけでした。

今までの先生との出会いを振り返ってみると、とてもいい先生ばかりでした。毎日楽しく学校生活を送っていたのも、先生方のおかげだなと感じました。その中でも特に印象深く残っているのは、小学五年生の時の先生です。困っていた時にいつも優しく手を差し伸べてくださったり、あらゆる面で頼りにしてくださいさったりした先生のことが大好きで、離任式では大泣きしながら先生とお別れをしたことを今でも覚えています。私もこの先生のように、子どもたちの悩みに気付き、手を差し伸べることのできる人になりたいと思

い、教師を目指しました。

そんな私が、「教師になりたい」という漠然とした気持ちから「教師になる」とはっきりと気持ちが固まったのは、教育実習で子どもたちとその恩師との出会いでした。初めて子どもたちの前に立って自己紹介をしたとき、「自分がみんなの前で授業なんて出来るのだろうか」と不安でいっぱいになったことを今でも覚えています。実際の授業は失敗の連続でした。それでも一生懸命授業を聞いてくれたり、「私も頑張るから、先生も頑張つてね」と励ましてくれたりした子どもたちや、的確なアドバイスをくださり、また陰で実習生の頑張りを支えてくれた先生方等、多くの人たちに支えられたからこそ、最後まで一生懸命やり抜くことができたのだと思います。「絶対先生になるからね」と、子どもたちとした約束をしっかりと守ることができました。

教員採用試験に晴れて合格し、西条市立壬生川小学校に勤めることになりました。地元ではなかったものの、祖父が五年間勤めた小学校での勤務と知り、うれしさ半分、不安が半分のスタートでした。初めての職員会議は、本当に何

を言っているか分からず、不安で押しつぶされそうになりました。何をしても初めてのことで、できていないことにすら気付いていないことも多々ありました。「こんなことを聞いてもいいのだろうか」と不安で中々聞き出せなかったり、知らないから、したことないから何でもしてもらったりと、多くの先生方に迷惑をかけてしまいました。

そんな中、自分自身が逃げ腰になっていくことに初めて気付くことができたきっかけが、クラスのある男の子でした。一学期とは全然違う行動を取るようになったその子の対応に悩んでいたとき、当時の校長先生に、「工藤先生は本当にその子と本気で向き合っているの。ちゃんと目を見て本気で叱ったことはあるの」と言われ、ハツとさせられました。もちろん、これまで手を抜いた指導をしていた訳ではないのですが、自分の本心を子どもたちに伝えられていなかったのだと痛感しました。そのことに気付いた時、校長室で涙が止まらなくなりました。このことを機に、自分の中で大きく変わる事ができたと感じています。

他にも、この一年間で本当にた

くさんの出来事がありました。授業の進め方や、指導の在り方、保護者との関わり方など、失敗や反省の連続でした。それでも、何事に対しても一生懸命向き合うことができたのは、校長先生や学年主任の先生の言葉があったからこそだと思います。子どもたちと共に学び、共に成長することができた一年になりました。

これまでに頂いた言葉の中に、「自分にしかできないことを見付けよう」というものがあります。同僚の先生方を見ると、どの先生も自分のよさを生かした学級経営や生徒指導等を行っています。自分には、どんなよさがあるのだろうかと考えたとき、「百人一首」があることに気付きました。中学から小倉百人一首を使っていた「競技かるた」に打ち込み、そこからたくさんのことを学びました。例えば、競技かるたには基本的に審判がおらず、選手同士の話し合いによって競技が成立します。そのため、自分の意見が相手に伝わるように話す必要があります。このことは日常生活においても必要不可欠なことです。他にも、百人一首を通して様々なことを学びました。その学びの中から一つでも多

くのことを子どもたちに伝えることのできる教師になりたいと思います。

この一年間を通して、本当にたくさんの人と出会い、たくさんの学びを得ることができました。しかし、教員生活はまだまだ始まったばかりです。できるようになったこと、まだまだ到底できないこと、自分自身でやってみたいことなどがたくさんあります。これからの長い教員生活の中での出会いを大切に、多くの子どもたちの記憶に残るような魅力ある教員になれるよう、これからも精一杯努力していきたいです。



教師のやりがい



上島町
岩城小教諭
菅 将太郎
(平二九卒)

教師になって三年目。長かったような、短かったような、とても不思議な気持ちである。しかし、教師として過ごした二年余りの時間は、様々な経験が盛り込まれた濃密なものとなっていることは間違いない。

教師一年目。私は、社会人として何も分からないまま現場に飛び込んだ。席に案内され、職場の先生方が温かく迎えてくださったのだが、当時はそれを感じる余裕さえなかった。一言でいうと、四月の記憶がほとんどない。やっとゴールデンウィークだとほっとしている、もう連休は明けていた。怒涛の一か月だった。ところで、校長室で初任給を手渡しされた日のことは、今でもはっきり覚えている。手渡しされることは最

初で最後であることもあり、先輩方も一緒になって喜んでくださったことがとても嬉しかった。その時撮ってもらった写真は今でも部屋に飾っている。

初任者としての一年間は、耐え忍んだ一年間であった。何度も何度も壁にぶち当たったり、押しつぶされそうになったが、たくさんの方々の支えのおかげで、乗り越えることができた。そして、学級経営、生徒指導、学習指導等、教師の仕事の幅広さ、その難しさを身をもって学ばせてもらった。

様々な項目がある中、私が一番学んだことは学級経営の大切さである。当時も現在も、これが教師として一番の核であるとの考え方に変わりはない。学級経営を成功させるにあたって、子どもたちとの信頼関係を築くことが大切であるということは大学でもたくさん学んできたつもりだ。しかし、どのように築いていけばよいのか。永遠の課題なのではないだろうか。分からないなりに、聞いたり、見たり、考えたりした結果、「子どもたちと同じ時間を過ごす」こ

とを意識し、今月の歌と一緒に歌う、休み時間一緒に遊ぶ、給食と一緒に食べるなど、思いつくままに行動した。やはり当時の自分には、分かる授業や的確な生徒指導は難しい。そんな自分でも「これならできる」と思って続けた。初任者の一年間で学んだ一番大きなものになった。

教師二年目。島嶼部の学校へ異動となった。学級の人数は四分の一。二年目ではあるものの、環境がガラッと変わった。新たなスタートのような気分だった。学校規模が小さくなると、仕事が楽になるのではと思っていた。確かに、学級の人数が少なくなる分、学級における事務作業は減る。しかし、今まで学年主任の先生がしてくださっていた学年会計をはじめ、様々な学年行事の運営などを自分一人でこなさなければならぬ。つまり学校規模が小さくなればなるほど、所属する教師の数が少ないので、一人あたりの校務分掌が多くなる。しかし、様々な仕事を幅広く経験することができ、私自身はそれがとても新鮮であっ

た。

この一年間、様々な業務の中で、体育主任として体育行事の運営に携わったことが大きく心に残っている。初めて学校全体を動かす立場となり、学級経営だけでなく、学校運営の一部を担うことになった。しかし、何をどうしていいかわからず、初任者の時のように右往左往していたことが記憶に新しい。課外活動のミニバスから始まり、新体力テスト、運動会、陸上、駅伝といった様々な活動を主任の立場で経験した。これらの活動の中で、教師側が必要な準備、指導方法、子どもたちとの関わり方などたくさん学んだ。当時は感じる余裕がなかったけれど、たくさん先生の支えられ、乗り越えることができたと思っ

た。たった二年余りの教師生活を振り返るだけでも、苦勞話の方がどうしても多くなってしまふ。しかし、教師は一生続けたい職業であることに変わりはない。学級経営ひとつとっても、同じ方法では対応できない。だが前向きに捉える



と、多種多様で、その試行錯誤が自身の教師力の向上につながることを考えている。今の自分はまだまだスタート地点に立ったに過ぎない。様々なことに意欲的に取り組むことで子どもたちと一緒に成長していきたい。

最近では、「大人気ない」という子どもたちからの言葉を振り切り、全力で鬼ごっこをした。学校規模が小さいので、異学年児童とも遊ぶことが多い。普段勝ち誇っている六年生を優先的に狙い、密かに楽しんでいることは内緒である。これからも全力で汗をかき、体当たりで子どもたちと接する教師であり続けたい。

仕事も人生も楽しむ



大洲市
長浜中教諭
前田 麻里
(平二三卒)

私が「教師になろう」と心に決めたのは、大学時代です。同級生の仲間や先生方、実習先での子どもたちとの出会いの中で、「教育の現場で役に立ちたい」という確かな思いが芽生えました。採用試験に合格し、「理論と実践を往還させ、生涯に渡って学び続けること」を胸に刻み、教師生活のスタートを切りました。

あれから八年が経ち、年齢を重ねたせいも、大学時代のように徹夜で一気にレポートを書く体力はもうありません。しかし、現在のほうが、自分が活動的になったような気がします。

まずは部活動。バレーボールに携わって八年目になりました。初任者当時は未経験からの出発。最初は何をしていたか分からず、ひたすら生徒の中に混ざって練習し

ました。対外試合で、「君、先生？生徒かと思った。あはは(笑)」と、うれしいような悲しいような勘違いをされていました。指導法については、先輩の先生や外部指導者の方々から教わったり、他校や高校に合同練習をお願いして教えていただいたりしました。休日には練習試合が多く入り、事務仕事との両立が大変ですが、三年生が引退するとき、「自分のできることは全てやり切った。みんなと頑張ってきてよかった。」と思えるように、楽しいときも苦しいときも、生徒とともに過ごす時間を大切にしています。また、最近はこちらに興味を沸き、全日本女子バレーボール監督の中田久美さんの番組を見たり、青山学院大学陸上部監督の原晋さんの本を読んだりしています。二人が共通して述べているのが、「選手に考えさせ、選手自身が気付くことが大切だ」ということです。基本的な事項を教えながらも、生徒に考えさせる問いかけを意識して指導していきたいです。

教室に通っています。もともと筆で文字を書くことに苦手意識がありました。習字の先生から作品を仕上げると、生徒も意欲的に取り組むようになりました。

また、卒業研究で俳句について研究していたこともあり、三か月に一度、夏井いつき先生の句会に参加しています。地域のベテランの方々比べると、私の俳句は拙いもので、特選にもほとんど入りませんが、唯一の得意分野は「食べ物俳句」です。トマト、生姜、アイスクリームなどを織り込むと、楽しい気分になります。また、意外な展開を生み出す「取り合わせ」に加え、そのものをじっくりと表現する「一物仕立て」、五七五のリズムにとらわれない「破調」にも挑戦しています。地域の方々や夏井先生から優れた表現方法を学ぶことで、語感を磨き、俳句の指導に活用することができています。

そして、駅伝。気分転換と、弛んだ体を引き締めるために始めたジョギングだったのに……、ふとしたきっかけで市内の駅伝大会に出ることになり、県クラブ駅伝にも出場しました。お子さんがいらっしゃるママさんランナーに圧倒的な差で負けていますが、自分の記録に挑戦したり、様々な方々の交流が広がったりして、参加して良かったと思っています。今年も秋の大会に向けて、生徒と一緒に練習する予定です。

大学時代の私に比べると、活動範囲が広がり、心も身も引き締まったと思います。しかし、重要度の高い学級経営や校務が重なり、実際は句会も習字教室も、お休みすることが多いです。親も年齢を重ねてきたので、自分の仕事や趣味だけをしているわけにはいきません。

「ワークライフバランス」。今、私が直面している課題です。しかし、教室に行くと、生徒との何気ない会話で笑顔になれます。放課後の体育館では、懸命にボールを追いかける生徒の姿に、勇気付けられます。仕事で行き詰まったときには、校長先生をはじめ諸先生方が一緒にあって対応を考えてくださいます。たくさんの方々への感謝の気持ちを力に変え、仕事も人生も楽しみ、生徒の前で輝ける教師に成長していきたいと思えます。



ただいま、八幡浜市



八幡浜市
神山小教諭
一宮 章紘
(平三二卒)

私は今、八幡浜市の新規採用教職員として働いています。実は、私は、八幡浜市の出身で、大学生時代、大学院生時代を経て、六年ぶりに帰郷する形となりました。

今、二か月の勤務が終わろうとしています。学生の頃と比べると格段に忙しい日々で、時が流れる速さが二倍にも、三倍にもなったような気分です。そのような中で、一日たりとも同じような日がなく、刺激的な毎日を送れる面白さも少しずつ感じられるようになってきました。時に、ふと頭をよぎることがあります。それは、自身のこれからについてです。二十四歳の若輩者である私が、子どもたちに何を、どのように伝えていくのか、子どもたちとどのような日々を過ごしていくのか、そんなことを模索しています。私が受け持つ四年生は、エネル

ギーにあふれる、心優しいメンバーがそろったクラスです。

先日の遠足では、「令和」という人文字作りに挑戦していました。きつかけは、ある女の子が「先生、令和の人文字を作りたいです。」と言ってきたことでした。「わあ、いいね。先生は上から写真撮るから、文字はみんなで作ってみてね。」そう答えました。

すると、彼らは、本当に「令和」の人文字を作り始めました。「みんなー、ちょっと集まって。」「令和」、作ろうや。」「早く寝ろ転がって。」「え、僕はどうしたらいいの。」そんな声が響きながら、自分たちの力で文字を作り上げていきます。徐々に位置が決まっていき、動く児童の数も減つてきました。しかし、上から見ていると、全く「令和」の文字には見えません。「とりあえず、今の様子を写真に撮って、みんなに見せてみようか。」そう思って、写真を撮って、子どもたちに見せてみました。

「え、全然できてないやん。」そんな呟きが聞こえてきました。「うーん。もう諦めるかな……。」心の中でそう思っていました。ある男の子の呟きでそんな心配

は、すぐに消えていきました。

「帽子で、『令和』って作ればいいやん。」その声を聞いて、何人かの児童が帽子を集め始めました。そして、全員の赤白帽子を集めて「令和」の文字を作り上げました。文字の後ろにクラス全員が横に並び、肩を組んで写真を撮りました。

試行錯誤を繰り返しながら、「令和」の文字を作り上げていく子どもたちの様子を見て、私は胸が熱くなっていきました。自分たちのアイデアを、自分たちで形にしていくことは簡単ではありません。その苦労に負けることなく、一生懸命挑戦し続ける姿を見て、「この子たちと、いっしょに進んでいきたいな。もつともつと楽しい一年間にしていきたいな。」と思いました。

そんな前向きな子どもたちと関わる中で、意識していることは、「昨日より一歩成長した自分、昨日より一歩成長したクラスになること」です。クラスにエネルギーがある分、もちろん課題もあります。けじめがつきにくかったり、ざわざわしてしまったりすることもあります。ときには、忘れ物をして涙することや、答えが分から

なくて泣き出すこともあります。まだ始まったばかりの一年間。一人一人の「個性」を大切に伸ばしていきたいと考えています。ペーシスは、人それぞれですし、時には逆戻りすることもあるかもしれません。しかし、終業式の日には、誰もが「成長したなあ。」と実感できるクラスを子どもたちとともに作り上げていきたいと思っています。

四月の終わりに、子どもたちに「四月の思い出を書いてみよう。」という宿題を出しました。すると、そこには予想外の思い出が記されていました。「四月の思い出



の一番は、始業式です。先生が、あきひろ先生に決まったとき、すごうれしかったからです。」と何名かの児童が書いてくれたのです。このとき、涙が出そうになるくらい嬉しさがこみ上げてきました。日々の業務は忙しいですが、子どもたちが自分に届けてくれる温かさや優しさ、子どもたちの日々の成長が大きなエネルギーになっています。

至らない点も多く、先生方や子どもたちにたくさん迷惑をかけてしまっていることも多くあります。だからこそ、一つ一つの学びを大切にして、まずは私自身が、絶え間ない成長を目指していきたいと思えます。

子どもたちに何を、どのように伝えていけるのか。まずは、自分自身も一人の教師として「昨日の自分より一歩成長できるように。」日々を過ごしたいと思えます。そして、子どもたちとどのような日々を過ごしていくのか。三月の終業式に、「このクラスでよかった。」と全員が思えるクラスとなるように、よりよい毎日をみんなで作っていきたいと思います。地元で働ける喜びを胸に、日々精進していきます。

子どもを まるごと受け止める



愛媛大学教育学部
附属小教諭
濱田 圭
(平二二卒)

この原稿依頼がきたのが、昨年度末。きつとこの原稿が会報に載るのは、新年度一学期の終わり頃。これを書いてる本日は、担任していた六年生の卒業式の日。式を終えた今だからこそ書ける気持ちを書き綴りたいと思います。

附属小学校の六年生は、全員が受験生。私も、これまでに受験や試験を経験していますから、受験が楽しいものではないことは知っています。むしろ、辛く、しんどいことの方が多い。それを十二歳の子どもたちが経験する訳ですから、精神的にしんどくなり、視野が狭くなり、友達関係がギクシャクする……。クラスの雰囲気が悪くなる……。学級として苦しい時期もありました。でも、それは本

当の子どもたちの姿ではなく、受験のストレスがそうさせてしまっているのは明らか。時には、何時間も愚痴をきいたこともありました。日記に十ページ以上の苦しい思いを書いてくる子もいました。どうにかして助けて。少しでも楽になってほしい。そう思いながら一年間、子どもたちと接してきました。

大方、受験シーズンが終わる二月上旬。同じ時期に、本校の研究大会がありました。私の研究教科が体育科ですので、受験で心も体も疲れ果てた子どもたちに、「仲間との一体感を味わってほしい。」「仲間の大切さを改めて感じてほしい。」という願いを込めて、バレーボールの単元を展開しました。これまでいくつも体育科の研究授業をしてきましたが、このときほど、子どもの願いと私の願いが一致した授業はありません。運動が苦手な子も得意な子も関係なく、全員が心の底からバレーボールを楽しんでいました。チームの連係プレーがうまくいけば、自然とハイタッチが生まれるし、うま

くいかなければ、自然と輪になって確認し合う。「体育科の授業なんだからそんな当たり前！」と言われそうですが、私がこれまでやってきた実践、見てきた実践すべてを通して、あんなに自然と仲間を求めている姿を見たのは初めてでした。昼休みになると、「先生、今日体育館でバレーしていい？」と聞いてくる子がだんだん増えていき、学級全員が昼休みにバレーをしていることもありました。ただ、チーム毎に戦術の練習をしているのかというと、そうではない。ネットもない、コートも適当な空間で、一つのボールをみんながにこにこしながら追いかけているのです。バレーの練習をしているのではなく、バレーを通じて、学級みんなのかかわりを楽しんでいるように、私には見えませんでした。そして、これが子どもたちが求めていたことなのだなあと感じました。「本当は、初めからみんなとこうしていたかった。でも、自分の気持ちに正直になれなかった。」そういうふうにも感じました。

もちろん、それまでにもいろいろな活動を通して学級づくりをしてきました。でも、なかなか大きな学級の成長には至らない。その繰り返しでした。日々の積み重ねが三学期に花開いたと言えそうなものかもしれませんが、やはり、子どもたちが心の底から求めているものを教師がどれだけタイミングよく汲んであげられるかが大事なのだなあと改めて感じています。

バレーボールの授業をきっかけに子どもたちの仲は驚くほど深まりました。単元が終わった後も、これまであまりかわってこなかったクラスメイトとのかかわりを深めようとする姿がいろいろな場面で見られ、本日、最高の姿で巣立って行きました。先ほど子どもからももらった手紙がこちら。



一年間やってきたことが報われたなあと思わせてくれました。この会報が出る頃、本日卒業した子たちは、中学校生活に慣れはじめた頃。苦しんでいないかなあ。悩んでいないかなあ。楽しんでいてほしいなあ。きつと、この子たちなら、煌めく素敵な中学校生活を送ってくれているはず。そう信じています。

先生へ
今までありがとうございました、先生のおかげで最高のクラスで小学校生活を終えることができました。どう表現したらいいのかわからないくらい先生に感謝していて大好きです。
今年、先生にたくさん反こうもしてきました。でも、温かく見守ってくれて、全部受け止めてくれて、ありがとうございました。相談にも乗ってくれて、私の小学校生活最後の一年が、煌めきました。また、小学校に遊びに行きます。
本当にこのクラスでよかったです。ありがとうございます。
6年星組 最高クラス!!

国際理解教育コースを終えるに際して

―愛にあふれた大同窓会―

国際理解教育コース

白石 人巳

(旧姓 阿部)
(平一六卒)



卒業して十年と何年かが経った昨年の春のことです。所用で松山に帰っていた私は、電源のあるカフェを求めて大学に来ていたのですが、ちょうど春休みでどこも休業中。困ったなあと思いつつ、ふと思いついて、恩師である佐藤先生にお電話したところ、「ちょうど話があるんだ」とまるでつい昨日まで普通に学校に通っていたかのようなお返事をいただきました。

そこで聞いたのが、わが国際理解教育コースの終焉でした。「既に新規の募集をしていない」、「次の卒業発表会が最後」。卒業したコースというのは、ずっとずっとあるものだと思っていたので、なんともいえないさびしい気持ちになりました。しかし福田先生・ボ

グダン先生を中心に大同窓会を企画していると聞き、さびしさの中に、楽しみが一つ生まれました。迎えた同窓会当日。私は全体の司会進行役を仰せつかりました。

先生や各回代表の声掛けで駆けつけた卒業生（と家族）約百人。そこに先生と学生を加えた百三十人ほどが国際理解教育コースを見届けるために結集しました。

すでに集めた文集と懐かしい写真が収められたDVDが配られ、まず、入学年次ごとに第一期から十七期までそれぞれが一言ずつ、後半は先輩後輩の交流会、そして最後に先生方からもコメントをいただきました。改めて一人ひとりの国際理解教育コースへの想いがひしひしと伝わる、とても愛にあふれた同窓会になりました。

私は第一期生ですが、各回の後輩たちが、それぞれ大学時代に学んだことを糧に、それぞれの世界で活躍している姿を見て、社会人としても良い刺激を受ける場ともなりました。中には地球の裏側からのスカイプ中継もあり、「これぞ国際理解教育コース！」という参加に、大いに盛り上がりました。

今回の同窓会に際して、愛媛大学教育学部同窓会より援助を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、今後の愛媛大学教育



学部同窓会の発展に教育学部国際理解教育コース卒業生も微力ながらお役に立ちたいと思います。



原稿募集

―次号 第二百二十九号―

短くても結構です。多くの方々のお気軽なご寄稿をお待ちしております。

◇ 「会員の声」・「今、教育に思うこと」について、ふるってご投稿ください。

★ 同期会や支部同窓会などの集会や活動について

★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について

★ 職場の近況や所感や活動について

★ 文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩・絵手紙等)について

★ 会員便り

1 旅行記 4 この頃思うこと
2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など
3 教育雑感 6 地域の名所紹介 (写真)

※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会で選ばさせていただきますので、ご了承ください。

◇ ★ 原稿〆切 十一月三十日

★ 発行 二月一日 予定

★ 字数 依頼者以外は千二百字厳守

四〇〇字詰原稿用紙の一行を十五字にして書いてください。

★ 写真 筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。

国際理解教育コースの思い出

わたしの国際理解教育コース



国際理解教育コース

松原 咲子

(旧姓 小野)

(平二二卒)

私が初めて買ったCDはタイ

タニックのテーマ曲「My Heart Will Go On」でした。中学一年

生の頃でした。映画の感動がその

歌と英語のもつ力強さとともに感

じられたのがきっかけで「英語や

洋画を学びたい！いつかそれに

関わる仕事がしたい！」と思うよ

うになり、その気持ちが十八歳の

私に国際理解教育コースを選ばせ

ました。

ここでは英語圏だけでなく日

本、中国などさまざまな国の言語

や文化について学ぶことができた

のですが、その中でも大学生活で

一番の思い出を挙げるとすれば、

大学二回生の時の中国（遼寧省大

学）訪問になると思います。それ

は私が思っていた中国の印象と異



とを教えてくださいました。あち
らの大学生の方々はみな優しい笑
顔で迎え、優しい心で受け入れて
くれました。その時のそれは私が
訪中する前のテレビや世間から聞
いていた中国の「偏見」とは全く
違っていました。恥ずかしいと思
いました。同時に、そこで初めて
「異文化交流ができたのだ」と感
じました。(左写真)

また大学生のある日、私は外国
人に道を聞かれ困っている日本人
に駆け寄ることができました。そ
れは決して英語を学んでいたから
ではなく、国際理解教育コースで
異文化を学び外国人に対して抵抗
がなくなっていたからだと思いま
す。

あれから十年そんな私も現在は
子持ちの主婦です。あの頃夢に描
いていた仕事についているわけ
もなく、国際理解教育コースの名
に相応しい仕事をしているわけ
もありません。しかし、中国へ
行ったことがないにもかかわらず
中国人全般を否定する人に一言
言うことができます。困っている
外国人に歩み寄って話を聞くこと
ができます。自分の子供に様々な
国の文化について話すことができ
ます。

とどのつまり、私がこちらで学
んだ「国際理解」とはとても小さ
く、全く形に残る目に見えるもの
ではなかったのかもしれない。
しかしそれは私が様々な人と関わ
ることでやがて広がり大きくなっ
ていく可能性のあるものではない

か。と思います。

今回国際理解教育コースがなく
なると伺い大変残念な気持ちでし
たが、私達を指導してください
先生方の意思は大なり小なり一人
ひとりの心にしつかり残っていく
ものと思います。(忘れようにも
先生方皆さんのキャラクターや授
業の内容が濃すぎて濃すぎて忘れ
られない！) 国際理解教育コース
で学んだ四年間は人生における良
い教訓、ご指導を頂いた大切な場
所であり、かけがえのない友人た
ちと過ごした大切な時間でした。
本当にありがとうございます



思い出の大学構内

国際理解教育コースの皆さん
が、在学時代に目にしていた教育
学部周辺の写真を集めてみまし
た。



教育学部玄関



教育学部横の寒桜



教育学部横の
タイサンボク



秋の教育学部中庭

コースはなくなっても、教育学
部はいつでも皆さんを待っていま
す。

同窓会事務局



先輩を偲ぶ

あしあと(2)

過去から現在そして未来へ

同窓会事務局

(教育学部同窓会百周年記念誌より抜粋)

高橋 良弘氏 寄稿

学生祭とサークル活動

(一) 開学記念第一回学生祭

昭和二十七年十一月、愛媛大学教育学部の開学を記念して、愛友会の執行部を中心に学生祭の計画が練られ、第一回学生祭が実施された。各研究会の展示、記念講演、仮装行列などが行われたが、学生祭の中心行事となったのは運動会であった。各研究部対抗のリーグには、担当教官がアンカーとして登場した。バザーも男女学生が協力して、図書館裏にテントを

張ってがんばった。聞けば最近の学生祭でのバザーはなかなか盛んだとのことだが、各研究部ごとのバザーとか。初期は一つとこころでやっていたのである。

仮装行列は松山市の名物となっており、ますますはなやかとなってきたようであるが、初期は参加人数も少なかった。第二回の仮装行列のプラカードの「サンガー夫人の失敗」など、その時代の風潮を表しているおもしろい。

(二) サークル活動、今昔

昭和二十六年六月、津田育英会から寄贈された大真館が竣工。この大真館利用して、研究会の後の懇親会などが行われた。卒業

生も、自分たちの手で築き、育てた各種の研究サークルの活動に、就職先から遠路かけつけてくれる者も多かった。

文科関係のサークル活動に比して、開学当初の運動部は、その数も少なく、予算もなくどの部も苦しい練習を強いられた。真黒なボールを修理しながら練習していた野球部。草を引きながらアウトコートを整備していたバスケットボール、バレーボール部。放課後持田教場の章光堂まで通っていた卓球部。全学が集まって結成して



学生祭風景—第2回— (昭28.11)

いるのは今も昔も変わらないが、その成績は芳しくなく、いつも商大の後塵を拝していた。

この時代、いかに体育館がほしかったことか。昭和三十年一月、米国のロサンゼルスに在住する愛媛県人八十八名が寄付せられた浄財を基礎として、新築された記念講堂は、施設に恵まれなかった運動部の学生の夢であった。この記念講堂となった敷地はもと食堂であり、二神さんご夫婦(現、正弁丹吾亭)が経営していた。そのオンボロ建築の一部へ畳を敷き、柔道の愛好者がドタンバタンとやっていた場所であった。今、広々としたすばらしい体育館を見ると、まさに今昔の思いにふけざるをえない。

昭和五十年度の学生団体文化関係の総数は愛媛大学全学で四十七。うち、教育学部に所属するのが二十八である。列举してみると次の通りである。

国語国文学・英語研究会・物理・化学・生物学・数学・地理学・地学・

美術・技術教育・家庭科・保健体育・教育学・学生心理学・書道・視聴覚教育・彫塑工芸・作文の会・演劇・児童文化・華道・茶道・フォークダンス愛好会・愛媛現代舞踊研究会・聾教育・障害児教育・理科教育・同和教育があり、参加学生は計六百七十九名であった。

次いで、全学一本になっている運動部は、すべてで三十七を数える。陸上競技・水上競技・硬式野球・硬式庭球・軟式庭球・バスケットボール・サッカー・バレーボール・ラグビー・卓球・バドミントン・柔道・剣道・体操競技・漕艇・ヨット・山岳・弓道・空手道・馬術・少林寺拳法・ワインゲンフオーゲル・ハンドボール・合気道・サイクリング・自動車・アーチェリー・ハイキング・跋涉グループ・スポーツ愛好会・スキー同好会・なぎなた同好会・ヘンシング・応援部・スキндаイビング・兵法研究。以上千二百二十二名がいずれかの運動部へ属している。

山越グラウンドには合宿所も完備

しており、ラグビー・陸上・野球・馬場・自動車練習などが、一度にやれるとはうらやましいかぎりである。それだけに松山商大と対等に戦い、四国・中国に知られた部活動も多くある。精進努力を祈ってやまない。

(三) 部活動の先駆者たち

昭和二十六年七月、教育学部第一期生(三年生と村上先生)たち十名は、北アルプス白馬岳登山を決行した。

宇奈月から日発の軌動車に「生命の保障をしない」の一札をとられて無料で乗せてもらい、黒部をさかのぼる。いくつかのこわれかけた釣り橋を渡って祖母谷(ばば谷)営林署小屋に一泊、裏道をたどって白馬へ。帰途、上高地から西穂高へ焼岳を縦走、さらに富士山へ土産話のために登って帰る。

昭和二十六年は爆発的な北アルプスブームをおこした前半であり、上高地河童橋では宿屋の番頭たちが、登山客を奪い合っていた。明神池も静まりかえっていた。

「若い者が北アルプスの一つぐらい征服する気迫がなくては……。」人文地理の村上節太郎先生のことばに発奮したのが、白馬登山のきっかけであった。

この北アルプス登山者を中心として、翌二十七年夏、卒業記念に北陸・東北・北海道への旅に出た。

出発から帰松まで約四十日間の大旅行であった。地方の新制大学の学生たちが、せいっぱい背伸びして、視野を広めようとしたものである。写真は登山用具も服装も整っていない「愛媛大学山岳会」の先駆者たちの素朴な姿である。

昭和二十七年の夏、北海道旅行の学生と平行して、教育学部の学生有志は、山内浩先生に従って河から資材を運び、石鎚へ愛大小屋を建築しようと努力していた。石鎚南壁の開発は一に愛大生たちの手によるものであった。

愛媛大学山岳会(会長山内浩先生)が、一九七二年十二月から翌年一月にかけて、ニュージールランド・マウント・クック遠征(隊長



石鎚愛大小屋建設(昭28.8)

五十嵐先生)をやったのはつとに有名であるが、すでに昭和三十三年には同じ山内先生によって「登山・ケービングクラブ」が結成されていた。次いで昭和三十四年に「四国ケービングクラブ」へ、そして「愛大探検部」が誕生、教育学部学生・OBを中心とした集いであった。

その活動は広く、県内鍾乳洞を次々と紹介し、一九六三年には、「奄美群島総合学術調査」の第一回が行われた。以後、毎年トカラ・奄美・沖永良部・沖縄へと調査団を送り、本年(一九七六年)三月には第八回を実施し、奄美群島の開発に大きな貢献をなしている。また、一九七五年八月の、ユー

ゴスラピア鍾乳洞探検(OBを中心とした七人)は、さらにその名を高めたものである。

昭和二十八年一月に、教育学部の学生たち(有志)は戦後初のスキーを大川嶺(現在の美川スキー場)でやった。これもまた山内先生の指導を受けたものである。前

年の秋、大川嶺の萱を刈り取ってゲレンデを作って準備し、雪の降るのを待って麓の大谷部落に泊まり、そこからこつこつと登って行った。当時は本物のスキー靴がなく、軍靴を改造し、カンダハーのないバンド式の昔なつかしい一枚板のスキーをはいていた。ヤッケもなく、トレパン、大学帽をかぶったこの異様なスタイルを現代



石鎚登山(昭27)

のスキーヤーたちはどんな目で眺めることであろうか。

よい指導者を得たこともしあわせだったが、大学発足当時の学生たちは、とにかく何でもやってやろう、見てやろうと、その開拓精神はきわめて旺盛であった。

一方、はんごうを片手に、松山を中心に自然の山野を歩き、楽しんだグループもある。武智正人先生を囲んだ「山歩きの会」とでも言えようか。日曜日を利用してこの山歩きには、多くの男女学生や教育学部の事務職員なども参加した。





会員の声

遠く宿縁を慶べ

―「教行信証」の序より

(Part 2)



吉原 宏文

(昭四二卒)

親鸞聖人は、王舎城の悲劇とい
う二五〇年前の古代インドで起
きた歴史的事件に注目されて、阿
弥陀如来の絶対的救済を証明され
た。

今日、我々人間は科学的技術の
超高速度の進歩によって、その文
化的恩恵を蒙こうむっている。しかし
ながら、日々のニュースは、大自
然災害をはじめとして、世界中で
今も多発する内戦・テロリズム・
難民現象の報道に、枚挙にいとま
がない。そしてわが足元日本にお
いても、日夜テレビ等において報
道される交通事故死・子どもがい

じめ・虐待・自殺等の事件を知ら
され悲しくなる。私は、序文の後
半に参入することによって、聖人
の御心の奥深い念願に触れてみた
い。「竊ひそかにおもみれば」とは、
静寂な冬のある日、囲炉裏のある
和室で一人、やかんのお湯の沸く
音だけが聞こえてくる。耳を澄ま
せば、如来の願いが心の底から受
け入れられる。南無阿弥陀仏（阿
弥陀仏に南無したてまつる、帰依
します）と称えてみる。親鸞聖人
の師匠の法然上人は一日に七万
遍しよばん称念しょうねん仏ぶつと聞きく。今、
こころなる私の全存在が絶対的に救

われると確信されるに至る。しか
しここに至るまでには、大変な道
程があったことを反省する。「あ
あ、弘誓くわぜいの強縁きやうえん、多生たしやうにも値あひ
がたく、真実の浄信じやうしん、億劫おつじやうにも
獲あがたし、たまたま行信を獲あば、
遠く宿縁しゆくえんを慶ゆべ」と。しかしな
がら、この慶ゆびも獲あられず、疑い
の網へんに心が覆おわれるならば、また
曠劫かうきやうを経巡へめぐることになるであろ
うと。まさしく斬るか斬られるか
の真剣勝負の今・ここである。私
は、今回も聖典と大拙訳を並記し
て考察してみたい。この教行信証
の短い序文において、聖人の絶対
他力のエッセンスが凝縮されてい
ると確信するからである。

「しかれば凡小ほんしやう修しゆし易やすき真教しんきやう、
愚鈍ぐどん往むき易やすき捷徑せつけい（近道）なり。
大聖だいしやう一代の教（釈尊が一生涯に
説かれた教説）、この徳海とくかいにしく
なし（及ぶものはなく）」

（鈴木大拙英訳文）

This being so, this teaching is
the true one which is easy to
practice for all of us who are

small and helpless; it is the
shortest passage to walk for
us who are stupid and igno-
rant. Nothing surpasses this
teaching of the Great Sage,
which was given by him while
on earth and which is indeed
the ocean of merit.

「穢えを捨てて浄じやうを欣おび、行ぎやうに迷まひ
に惑まじ、心昏こころく識寡しやくわく、悪重あくおく
障さわり多おほきもの（ここに如来（釈尊）
の発遣はつせん（釈尊がこの世から浄土へ
の往生を勧めること）を仰おほぎ、か
ならず最勝さいしやうの直道ちきやうに帰かへりて、もつ
ぱらこの行ぎやうに奉ほうへ、ただこの信を
崇あがめよ」

Let those who, aspiring for
purity, wish to give up defile-
ments, let those who are at a
loss as to the right practice
and the right faith, let those
whose minds are darkend and
whose understanding is defi-
cient, let those who are trou-
bled with evils and hindrances
weighing heavily on them

— let them all be rever-
ently mindful of Śākyamuni's
command to come to the Pure
Land, let them be sure of
taking refuge in the most
excellent path of truth, and let
them devote themselves exclu-
sively to living it and piously
embrace this faith only.

「ああ、弘誓くわぜいの強縁きやうえん、
多生たしやうにも
値あひがたく（いく度生たびを重おもねて
も容易やすにあえるものではなく）、
真実の浄信じやうしん、
億劫おつじやう（百万億劫
の略。無限に長い時間をあらわす）
にも獲あがたし。たまたま行信ぎやうしんを
獲あば、遠くとほく宿縁しゆくえんを慶ゆべ」

It is, indeed, a rare event,
however many lives one may
go through, that one happens
to find oneself so happily
situated as to be taken up in
Amida's Prayer for universal
deliverance! To attain to the
pure faith of truth, however
many numberless kalpas one
may live, is, indeed, the most

difficult thing. If not for the most favorable karmic combination in one's past lives, how could one ever come to cherish a faith in the Pure Land and live it accordingly?

「もしまたこの度疑網に覆蔽せられば(疑いの網におおわれるならば)、かへってまた曠劫を経歴(流転をくり返すこと)せん。誠なるかな、撰取不捨の真言超世希有の正法、聞思して運慮することなかれ(本願のいわれを聞きひらぎ、疑いためらうてはならぬ)」

If one should miss this opportunity through being beclouded by a veil of doubt, one may have to wait in vain for another numberless kalpas. There is absolutely no falsehood in the statement, "All will be taken up and none left behind!" The Right Dharma is indeed something wonderful, transcending things of this world! Let us,

therefore, feel no hesitancy in listening to it and reflecting on it!

「このに愚弄釈の親鸞、慶はしやかな、西蕃・月支(現在のインドとバキスタン・アフガニスタン地域)の聖典、東夏・日域(中国と日本)の師釈に、遇ひがたくして、いま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞へんことを得たり」

How fortunate it is that I, Shaku no Shinran, but an old, simple-hearted ignoramus, should come across the sacred texts from India and Central Asia and their commentaries by the teachers of China and Japan! It is so difficult to have access to them, and I now have them! It is so rare to listen to this message, and I now have heard it!

「真宗の教行証を敬信しつゝ、まことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。このをめぐりて聞くとつろを

慶び、獲ふ心のを嘆ずるなり」と

I, wishing to live it and to realize it, humbly declare my faith in the true teaching of the Pure Land, and, especially, I wish to acknowledge my indebtedness to the unparalleled favor bestowed upon me by the Tathagatas. Accordingly, I hereby heartily express my joy over what I have heard and deeply cherish all that I have gained.

(注) ①盲亀浮木(大海に住む盲の亀が百年に一度、海中から頭を出し、そつ／＼風のまにまに流された一つの孔がある流木が流れてきて、亀がちょうど偶然にもその浮木の孔に出遇うとつう極めて低い確率の偶然性を表す比喩譚。人間として生を受けること、また仏法に遇うことの難しさをたとえる譬話)

②劫(kalpa) (古代インドにおける最長の時間単位、宇宙論的時間。永劫、阿僧祇劫、兆載永劫

などと曠遠な時間を表すのに用いる。芥子劫(四方と高さが一由旬の鉄城があり、その中に芥子を充満し、百年に一度、一粒の芥子を持ち去って、すべての芥子がなくなったとしても、まだ劫は終わっていないとつう)。

③宿縁(purva-yoga) (過去の生存でなした行為(業)と現在の身に生じたその結果との因果關係(縁)をいう。宿因ともいふ、(宿には(かねてからの)(ひまじん)という意味がある。これより派生して、宿縁、宿業、宿世ともつばら(過去の生存以来の)、(前世からの)、もしくは、(過去世の)(前世の)の意味で使う。輪廻思想に基づく、新しい用法である。)

二〇一九(令和元年) 五月十六日(木)

731-0135 広島市安佐南区長束 一丁目一八一五

表紙作品について

「吉祥文呉須絵大皿」



作者 相澤このみ (平三〇卒)

【表紙説明】

砥部の磁器粘土に呉須で絵付を施した大皿です。麻の葉・青海波・矢筈など縁起の良い文様を八種類詰め込みました。

「いつかみんな揃って食卓を囲む」

これは転勤族で親戚一同と会う機会が少なかった、私の幼い頃からの憧れでした。その時にみんなで囲むお皿は家族全員が幸せを願う、縁起の良いものがありました。そう思いこの大皿を制作しました。

長寿・平安・繁栄・円満など、様々な意味を持つ文様に願いや祈りを乗せ絵付を施しています。

よく工芸品や着物にあしらわれる吉祥文様。古くから日本人の生活に馴染み、身の回りの様々なものを彩ってきました。陶芸を学んで先代たちの思いや知識、技術に支えられて今があると気付かされました。

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では、二〇一九年十月入学生を募集中です。
 〈募集期間〉
 二〇一九年六月十五日(土)～
 九月二十日(金)

放送大学はテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。



放送大学

教養はエネルギーだ。
 一科目からでも学べます

2019年度10月入学生募集中!
 (2019年9月20日まで)

問合せ先 愛媛学習センター
 TEL 089-923-8544

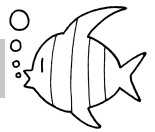
●インターネットで資料請求・出願できます。 ●資料請求専用フリーダイヤル
 放送大学 www.ouj.ac.jp ☎ 0120-864-600

○ 放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

○ 放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。

愛媛大学ミュージアムから



愛媛大学ミュージアムは、2019年11月11日で開館10周年を迎えます。ミュージアムでは本学が蓄積してきた研究成果を一般の方々に伝えることを目的に展示活動を行っています。常設展示は、第一常設展示「進化する宇宙と地球」、第二常設展示「愛媛の歴史と文化」、第三常設展示「生命の多様性」、第四常設展示「人間の営み」の四ゾーン10コーナーから構成しています。その中でも、近年第二常設展示では、「愛媛の書家三輪田米山の研究」、「四国遍路と世界の巡礼の研究」、「愛媛地域を中心とした文化に関わる研究」といった各分野を一年を三期に分けて展示公開しています。また、企画展示室・多目的ルームでは多彩な特別展・企画展を随時開催しています。令和元年最初の企画展として、2019年5月29日(水)～8月12日(月)の間、企画展示室にて、愛媛大学創立70周年・ミュージアム開館10周年を記念した特別展『博士たちのいきもの図鑑』を開催します。愛媛大学は伝統的に生物を対象とした研究者が多数在籍しています。今回はその中から10名の研究者、14種の生き物を取り上げ、研究のきっかけから研究活動、研究成果そして論文に至るまでを公開します。是非ミュージアムにお立ち寄り頂ければ幸いです。

愛媛大学創立70周年・ミュージアム開館10周年記念

特別展

博士たちのいきもの図鑑



会期：**5月29日(水)～8月12日(月)**

会場：愛媛大学ミュージアム 企画展示室

問合せ：
 ミュージアム受付 (午前10時～16時まで、火曜日休館) TEL: 089(927)8293

愛媛大学ミュージアム
 Ehime University Museum
 www.ehime-u.ac.jp/overview/facilities/museum/
 ※ご来館は、公共交通機関のご利用をお願いいたします。

TRUSTARS

愛媛大学チアリーディング部

部活動紹介

私たち、愛媛大学チアリーディング部「TRUSTARS」は2004年に創部し、現在15期生を迎え、計19名で活動しています。私たちのチーム名は、TRUST（信頼）と、STAR（栄光）という意味を持ち、日々仲間を信頼し合い、栄光を得るために、練習に励んでいます。



左が、チームの象徴のトラのマークです。冬に着るブルゾンや、Tシャツなどにデザインしており、とてもかっこよく、親しまれています。

私たちの活動は、主に2つで、1つ目は、地域イベント、学内の部活動応援、地域のスポーツ応援、地域、企業、施設などのイベント出演をさせていただいています。見に来てくださった方々に

「元気、勇気、笑顔」を届けて、笑顔に、そして元気になってくださることが私たちのやりがいです。地域でのイベントでは、松山の春祭りパレード、八幡浜市のサイクリングイベントに参加し、毎年たくさんの人に見ていただいています。企業の納涼祭や、ホテルの桜まつりなどにも出演し、会場を盛り上げるなど、どのイベントもとても楽しく参加させていただいています。施設では、小学校や、障がい者支援施設などで演技をさせていただいています。チアリーディングというスポーツを見たことない人たちに見てもらい、チアリーディングを知っていただくことができ、とても元気になった、感動したなどと言っていただけることが私たちの励みになっています。また、松山市の学生消防団に加入し、消防フェスタ、出初式に毎年参加し、演技をさせていただいています。

スポーツ応援では、愛媛大学の部活動の大会の応援や、愛媛のスポーツチーム「オレンジバイキングス」、「FC今治」「マンダリンパイレーツ」「伊予銀行 VERTZ」の応援、ハーフタイムショーへの出演などを行っています。また、愛媛県内だけでなく、広島で行われたフットサル大会、アイデムカップのオープニングを飾らせていただいたり、主に、県内での活動ですが、県外で活動をさせていただいたりしたこともあります。学内の活動では、愛媛大学のリレーマラソン大会、学祭でパフォーマンスをし、友人などたくさんの方々に毎年喜んでいただいています。

もう一つの主な活動は、大会出場です。チアリーディングの大会はあまりなじみがないと思いますが、2分30秒の演技構成で、元気さ、技のキメ感、難易度、同調性、シャープさ、力強さ、などが得点となり競い合います。私たちは得点を少しでも上げられるよう、日々新しい技に挑戦したり、技を安定させるために練習をしています。昨年度は、中四国大会で、規定の点数を取ることができ、「JAPAN CUP」という全国大会に出場することができました。今年の目標は、「JAPAN CUP」出場はもちろん、創部以来まだ果たしたことの無い、インカレで準決勝進出することです。これからも進化し続けるTRUSTARSをどうぞ応援よろしくお願い致します。



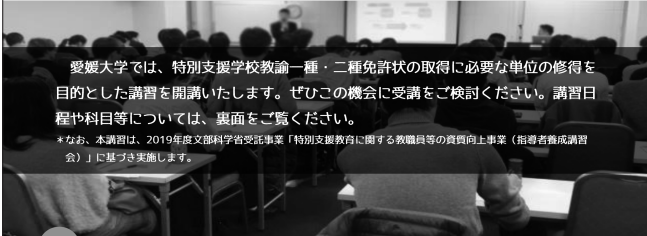
愛媛大学チアリーディング部
代表 塩梅 美侑
イベント依頼：trustars.sound@gmail.com

特別支援学校教諭 免許法認定通信教育講座案内



令和元年度

愛媛大学 特別支援学校教諭
免許法認定通信教育



愛媛大学では、特別支援学校教諭一種・二種免許状の取得に必要な単位の修得を目的とした講習を開講いたします。ぜひこの機会に受講をご検討ください。講習日程や科目等については、裏面をご覧ください。

*なお、本講座は、2019年度文部科学省委託事業「特別支援教育に関する教職員等の資質向上事業（指導者養成講習会）」に基づき実施します。

Point 1

特別支援学校教諭の一種・二種免許状の取得をサポートします！

Point 2

インターネットを活用した認定講習のため、「いつでも」「どこでも」学ぶことができます！

Point 3

免許状の取得申請が最短1年*で可能となります！

*勤務状況や希望する免許状の条件等によって異なる講座数や免許状発行までの期間は異なります。詳しくは所属先の教育委員会にお問い合わせください。

申込受付期限

第一期 令和元年 7月5日(金)

第二期 令和元年 9月6日(金)

当日消印有効



HPのQRコード

※申込は実施要項添付の申込書等のご送付をもって受付いたします。受付の開始は6月19日頃の予定です。※実施要項は、本認定通信教育HomePage (<http://ehimeuniv-ninteikoshu.jp/>) にて公表しています。

受講料

1講座 5,000円

※学習管理システム「igacco」の利用料を自己負担していただきます。開講や単位認定に必要な費用は文部科学省の委託事業費でまかないます。

受講対象者

- ▶ 特別支援学校教諭のうちの基礎免許状で授業を行っている者、もしくは特別支援学校教諭二種免許状を有している者で一種免許状の取得を希望する者。
- ▶ 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校の現職教員で、特別支援学校教諭二種免許状取得を希望する者。
- ▶ 特別支援学校教諭の免許状を有している者のうち、領域追加を希望する者。

令和元年度 開設科目(12科目12単位) 文部科学省認定(令和元年6月10日付)

第一期 講習日程 7月24日(水)~10月27日(日)
最終試験 10月26日(土)、27日(日)
*最終試験日は会場によって異なります。

講習科目	担当者	定員
特別支援教育概論(第1欄) *第二期と同科目です。	荻田 知則 中野 広輔 榎木 暢子	50名
視覚障害者の心理・生理・病理特性と支援(第2欄)	荻田 知則 氏間 和仁 (広島大学)	40名
視覚障害者の教育課程と指導法(第2欄)	荻田 知則 氏間 和仁 (広島大学)	40名
聴覚障害者の心理・生理・病理(第2欄)	加藤 哲則	40名
聴覚障害者の教育課程と指導法(第2欄)	加藤 哲則	50名
見への困難への対応(第3欄)	荻田 知則 中野 広輔	50名
重複障害児教育総論(第3欄)	荻田 知則	40名

第二期 講習日程 9月25日(水)~12月27日(金)
最終試験 12月26日(木)、27日(金)
*最終試験日は会場によって異なります。

講習科目	担当者	定員
特別支援教育概論(第1欄) *第一期と同科目です。	荻田 知則 中野 広輔 榎木 暢子	70名
知的障害者教育総論(第2欄)	荻田 知則 榎木 暢子	80名
肢体不自由者教育総論(第2欄)	榎木 暢子 荻田 知則	70名
病弱者教育総論(第2欄)	中野 広輔 榎木 暢子	60名
障害支援機器を用いた合理的配慮概論(第3欄)	荻田 知則	70名
重度重複障害児の健康教育(第3欄)	榎木 暢子 下川 和洋 (NPO法人地域けきぼーと研究所) 業師神 裕子 荻田 知則 中野 広輔	40名

問い合わせ先

愛媛大学免許法認定通信教育事務局

[Address] 〒790-8577 愛媛県松山市文京町3 [Tel] 089-927-9517

[Mail] eu.ninteikoshu@gmail.com [HP] <http://ehimeuniv-ninteikoshu.jp/>

第10回「愛媛大学ホームカミングデー」開催のお知らせ

【記念式典】

日 時：令和元年11月11日(月) 15:00 開式
会 場：ANAクラウンプラザホテル南館
4Fエメラルドルーム

【記念祝賀会】

日 時：令和元年11月11日(月) 18:00 開式
会 場：ANAクラウンプラザホテル本館
4Fダイヤモンドボールルーム

参加費：未定

今年度、愛媛大学は、開学70周年を迎えます。また、卒業生の皆様や退職された教職員の方々に大学の現状をお伝えし、交流を深める目的で実施しているホームカミングデーが、今年10年目の節目を迎えます。

そこで、今年度は開学記念日の11月11日月曜日、松山市ANAクラウンプラザホテルを会場に、開学70周年記念式典との合同開催を計画いたしました。詳細につきましては、校友会事務局から案内が届きます。卒業生の皆様のご参加をお待ちしています。

<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/~dosokai/>

準備をしています。
を深めるために、でき
れば、掲示板を設ける
情報をお知らせしま
す。
同窓会員同士の交流
支部活動、会合、イ
ベント等のスケジュー
ルなど、タイムリーに
URLは上記

教育学部同窓会
ホームページへ
アクセスを！

dosokai@ed.ehime-u.ac.jp

お問い合わせ、会報
への寄稿、住所、勤務
先変更などの諸連絡に
ご利用ください。お待
ちしています。

メールアドレスは上記

教育学部同窓会
インターネット
開設してきます！

令和元年度
支 部 長 会 報 告

1. 日 時 令和元年6月8日 10:00～13:30
2. 場 所 校友会館1F メープル
3. 日 程 (1) 開会のことば
(2) 会長挨拶
(3) 教育学部長挨拶
(4) 各支部長自己紹介及び支部紹介
(5) 議長選出
(6) 議事
議案1 平成30年度事業報告
議案2 平成30年度決算報告・監査報告
議案3 令和元年度事業計画案審議
議案4 令和元年度予算案審議
議案5 令和元年度支部助成金案審議
議案6 同窓会会則改正案審議
議案7 支部活動支援金申請案審議
議案8 会報担当者案審議
議長退出
(7) 連絡事項等
・第16回教育学部同窓会懇親会報告
・第10回ホームカミングデーについて
(8) 閉会挨拶 副会長

4. 概 要

- ・今年の支部長会は支部長23名（県内支部21名、県外支部：京都支部1名、東京支部1名）と本部役員21名の計44名の参加のもと事務局からの提案議題（議案1～議案8）について協議を行った。会のはじめに顧問の佐野教育学部長から2年後の学部改組を含む教育学部の現状と今後についてお話をいただいた。
- ・事務局からは以前から検討課題としていた同窓会会則の改正案を提出し、承認を得た。改正された会則は7月上旬にHPに掲載を予定している。
- ・また、昨年度は3支部の活動に支援を行った「支部活動支援費」の申請方法について協議を行い、簡素化を図った。簡素化された様式（様式1～3）についてもHPに掲載を予定している。



支部長会の様子

愛媛大学教育学部同窓会会則

第1章 総則

第1条 (名称)

本会は、愛媛大学教育学部同窓会と称する。

第2条 (所在地)

本会は、事務局を松山市文京町3番地愛媛大学教育学部事務課内に置く。

第3条 (支部)

本会は、愛媛県下各都市及び必要と認めるところに支部を置く。

第2章 目的及び事業

第4条 (目的)

本会は、会員相互の親睦向上を図るとともに、母校を支援し、もって教育振興に寄与することを目的とする。

第5条 (事業)

本会は、目的達成のため次の事業を行う。

- 1 会員の親睦並びに教育振興に関する事業
- 2 会報発行に関する事業
- 3 母校の支援に関する事業
- 4 その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章 会員

第6条 (会員)

本会は、次の会員をもって組織する。

- 1 正会員
 - ・愛媛師範学校(男・女)卒業生
 - ・愛媛青年師範学校卒業生
 - ・愛媛大学教育学部卒業生
 - ・愛媛大学大学院教育学研究科等修了生
- 2 客員
 - ・母校の現職員及び旧職員
- 3 準会員
 - ・愛媛大学教育学部在学学生
 - ・本学部卒業生外の大学院教育学研究科 在学学生

第4章 役員

第7条 (役員)

本会に、次の役員を置く。

- 1 顧問 若干名 会長 1名 副会長 若干名
 - 2 理事 若干名 常任理事 若干名
 - 3 監事 2名
 - 4 事務局長 1名
 - 5 支部長 各支部 1名 副支部長 各支部 2名
 - 6 支部幹事 会員在勤各学校 1名
- 第8条 (役員選任)
- 1 顧問は、愛媛大学教育学部長及び同窓会長経験者を推す。
 - 2 会長・副会長・監事は、総会において選任する。

第9条 (役員任期)

会長・副会長・理事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。なお、任期途中で交代した場合は、前任者が残した任期とする。

第10条 (役員任務)

- 1 顧問は本会の主要な事項について諮問に応ずる。
- 2 会長は、会務を総括する。
- 3 副会長は、会長を補佐し会長事故あるときはその職務を代行する。
- 4 常任理事は、常任理事会を組織し、本会の諸事業を企画立案し、理事会の議案に資する。
- 5 理事は、理事会を組織し、本会の主要事項について協議する。
- 6 監事は、本会の事業状況及び収支決算状況を監査する。
- 7 支部長は、各支部の会務を掌る。

第5章 会議

第11条 (総会) 総会は年1回開催し、支部長会をもって総会に代えることができる。

- 1 事業報告・決算書
- 2 事業計画・予算書
- 3 役員選出

4 本会の目的達成に必要な事項

第12条 (支部長会)

- 1 支部長会は、本会の目的達成に必要な事項について協議する。
- 2 支部長会は、会長が招集し、必要ときは臨時招集することができる。
- 3 支部長会の議長は、支部長の中から選出する。

第13条 (理事会)

- 1 理事会は、年3回(5月・8月・1月)開催し、常任理事会より提出された議案について協議する。
- 2 理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。
- 3 理事会の議長は、会長が務める。

第14条 (常任理事会)

- 1 常任理事会は、年5回開催し、会則第5条に示された事業の企画立案をし、理事会の議案資料の作成にあたる。
- 2 常任理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。
- 3 議案資料の作成は、事務局長がこれにあたる。
- 4 常任理事会の議長は、会長が務める。

第6章 会計

- 第15条 本会の経費は、会費及び寄付金等をもってこれにあてる。
- 第16条 本会の会費は、入学の際に納めるものとする。
- 第17条 本会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

第7章 会則変更

第18条 本会の会則を変更するときは、総会の決議を経なければならない。

附則

本会の会則は、令和元年6月8日より実施する。本会の運営上必要な内規は別に定める。

平成30年度 事業報告

令和元年度 事業計画

Table with 3 columns: Date, Event Name, and Details. Includes events like '平成30年度入学式', '平成29年度会計監査', '第1回常任理事会', etc.

Table with 3 columns: Date, Event Name, and Details. Includes events like '平成31年度入学式', '平成30年度会計監査', '第1回常任理事会', etc.

平成30年度 決算書

令和元年度 予算書

(収入の部) (単位:円)

(収入の部) (単位:円)

Table with 5 columns: Fee Item, Budget, Actual Income, Change, and Summary. Includes items like '会費', '寄付', '旅費返金', etc.

Table with 5 columns: Fee Item, Budget, Previous Year Budget, Change, and Summary. Includes items like '会費', '寄付', '雑収入', etc.

(支出の部)

(支出の部)

Table with 5 columns: Fee Item, Budget, Actual Expense, Change, and Summary. Includes items like '会議費', '旅費', '印刷費', etc.

Table with 5 columns: Fee Item, Budget, Previous Year Budget, Change, and Summary. Includes items like '会議費', '旅費', '印刷費', etc.

※△は減額を示す

令和元年度 役 員 表

愛媛大学教育学部同窓会

本	顧問	佐野 栄・奥 定一 孝		監 事	矢野 裕 司	常任幹事	阿 部 修 一
	会 長	高橋 治 郎			相原 孝 裕		
部	副会長	立 入 哉	山 下 雅 司	村 上 朋 子	菅 田 顕	渡 邊 恵 理	
	理 事	青野 多喜夫	長 野 照 道	山 本 千 鶴 子	満 田 泰 三	村 上 嘉 一	
		鎌田 サチ子	和 田 和 子	阿 部 晋	垂 水 葉 子	井 出 節 雄	
		後藤 陽 三	辻 井 芽 美 子	白 石 久 美 子			
		森川 哲 也	松 岡 弘 子	金 築 治 美	吉 岡 亜 紀 子	濱 田 圭	
	土手 佳 代	薬師神 吉 啓					

支 部 名	支 部 長		副 支 部 長		副 支 部 長	
	川之江・新宮	松 本 健 吉	金生第一小	野 村 浩	新宮小・中	高 橋 浩 二
伊予三島	原 田 尋	中之庄小	毛 利 雅 彦	三 島 小	星 野 尚 子	寒 川 小
土 居	越 村 慎 治	土 居 小	加 地 孝 昌	北 小	高 木 淳	関 川 小
新居浜	中 野 久	金子小	井 川 昭 二	金 栄 小	高 橋 美 鈴	泉 川 小
西 条	秋 山 恵 美	橘 小	久 門 宣	神 拝 小	山 本 直 子	橘 小
東予・周桑	木 原 敏 彦	田 滝 小	岸 田 英 之	丹 原 小	千 羽 達 也	楠 河 小
今 治	村 上 圭 司	乃 万 小	高 橋 隆 司	常 磐 小	別 府 健 二	国 分 小
今治・越智	渡 邊 誠 吾	岩 城 小	藤 原 愛 明	朝 倉 小	大 澤 宏 伸	九 和 小
北 条	原 佳 嗣	正 岡 小	芳 野 妙 美	浅 海 小		
松 山	齊 藤 照 夫	生 石 小	尾 脇 康 資	味 生 小	笹 本 太 三 郎	勝 山 中
東 温	井 原 聡 博	拝 志 小	八 木 良	重 信 中	富 永 俊 樹	南 吉 井 小
伊 予	伊 達 泰 明	広 田 小	松 浦 博 文	下 灘 小	橋 本 佳 史	北 山 崎 小
上 浮 穴	畷 王 繁 嘉	美 川 小	則 友 美 紀	明 神 小	寺 本 栄 一	畑 野 川 小
大 洲	小 川 幸 雄	菅 田 小	堀 井 良 彦	平 野 小	竹 本 親 由	河 辺 中
喜 多	大 野 弘 玄	五 十 崎 小	元 永 和 孝	小 田 小	柴 川 一 也	立 川 小
八 幡 浜	梶 原 章 代	白 浜 小	脇 坂 耕 三	愛 宕 中	河 野 靖	愛 宕 中
西 宇 和	竹 上 正 也	九 町 小	平 家 良 則	瀬 戸 中	藤 堂 玄 人	大 久 小
西 予	片 山 文 彦	中 川 小	堀 内 良 之	城 川 中	滝 澤 治	三 瓶 中
宇 和 島	矢 野 淳 一	鶴 島 小	岡 田 雅 彦	下 灘 小	中 村 米 貴	清 満 小
北 宇 和	高 田 徳 雄	近 永 小	古 谷 孝	泉 小	松 本 和 美	近 永 小
南 宇 和	若 松 隆 仁	僧 都 小	片 山 新 也	家 串 小	清 水 美 和	久 良 小
附 属	森 川 哲 也	附属特支				

県外支部	東 京	森 孝 枝	山 下 正 洋	
	京 都	河 野 直 樹		
	大 阪	神 垣 鉄 雄	本 宮 久	
	神 戸	木 原 孝 造	平 山 昇	加 登 康 智
	岡 山	神 崎 順 治		

編集委員	菅田 顕	阿部 晋	山下 雅司	渡邊 恵理	村上 朋子	阿部 修一
------	------	------	-------	-------	-------	-------

会報の送料納付について

会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。
 出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇一七一二七五四

送り先 〇七九〇一八五七七

松山市文京町三
愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

振替用紙には、左記のように「懇親会会費」「会報送料」「寄付」と記載しています。送金の際には、該当の項目に✓をいれてください。なお、恐れ入りますが、卒業された年もご記入をお願いします。

用紙は同窓会懇親会が開催される年の二月発行の会報にチラシと一緒にはさんでお届けしますが、必要な場合は郵送いたします。郵便局でも常備されていますが、前述の記載はしていません。前記の記載はしていませんが、郵便局で記入して送る場合は赤色の振替用紙をお使いください。

【お知らせ】

第十七回教育学部同窓会懇親会
 期日…令和二年八月二十二日(土)
 場所…ANAクラウンプラザホテル松山

寄付者名

平成31年1月～4月
 令和元年5月

敬弔

(物故会員)

野口瑠璃子	谷上雄幸	横濱雄幸	大野正義	都築辰蔵	百合田歌子	八塚健・睦子	一柳吉彦	五十崎和子	高山悟・達子	小崎佳奈子	横山良隆	山内志津江	菅邦生	大野タミ子	大野紀清	池内耕作	茅田正徳	森正徳	渡部喜代隆	松本有澄	星川真澄	岡田豊	清水昇通	森孝枝
-------	------	------	------	------	-------	--------	------	-------	--------	-------	------	-------	-----	-------	------	------	------	-----	-------	------	------	-----	------	-----

30・12・21	30・12・20	30・12・19	30・12・12	30・12・12	30・12・12	30・12・9	30・12・7	30・11・29	30・11・28	30・11・24	30・11・24	30・11・22	30・11・14	30・11・7	30・10・4	30・8・22
----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	---------	---------

(昭35・愛大)	(昭18・女師二)	(昭24・愛師)	(昭15・青師)	(昭32・愛大)	(昭32・愛大)	(昭20・愛師)	(昭25・愛師)	(昭34・愛大)	(昭37・愛大)	(昭16・県師二)	(昭29・愛大)	(昭25・愛師)	(昭31・愛大)	(昭23・愛師)	(昭15・県師一)	(氏名)
永井宏佳	玉井恵美子	橋本和彰	石川唯二郎	大野徹雄	諏訪秀明	桧垣要	善家徳雄	宇都宮鈴子	西原道幸	高橋雅邦	渡部安良	中川年子	坂本利夫	倉田静子	喜安隆	(氏名)

31・4・21	31・4・20	31・4・19	31・4・12	31・4・11	31・4・4	31・3・31	31・3・27	31・3・22	31・3・6	31・3・2	31・2・27	31・2・15	31・2・5	31・1・25	31・1・10	31・1・6	31・1・4	30・12・21
---------	---------	---------	---------	---------	--------	---------	---------	---------	--------	--------	---------	---------	--------	---------	---------	--------	--------	----------

(昭27・愛大)	(昭35・愛大)	(昭31・愛大)	(昭28・愛大)	(昭14・女師)	(昭31・愛大)	(昭25・愛大)	(昭37・愛大)	(昭34・愛大)	(昭23・愛師)	(昭19・愛師)	(昭32・愛大)	(昭24・愛師研)	(元教育学部教授)	(昭20・愛師)	(昭29・愛大)	(昭31・愛大)	(昭23・愛師研)	(昭22・愛師)	30・12・21
木戸博隆	渡部良温	河野明美	戸田有俊	上甲ヤエコ	佐川俊明	石川定男	西原昭紀	赤星皓一	渡辺光人	牧野光利	増元晶尚	玉井洋三	金谷茂	菊地泰博	村上孝幸	田村宗信	白石富美子	柳瀬潔	(氏名)

会員写真館



前号(127号)から始めた会員の皆さんが撮った写真を紹介するコーナーです。それぞれの地域の名所や会員の皆さんが何気なく撮った写真をぜひ投稿してください。お待ちしております。



東温：風穴の青いケシ

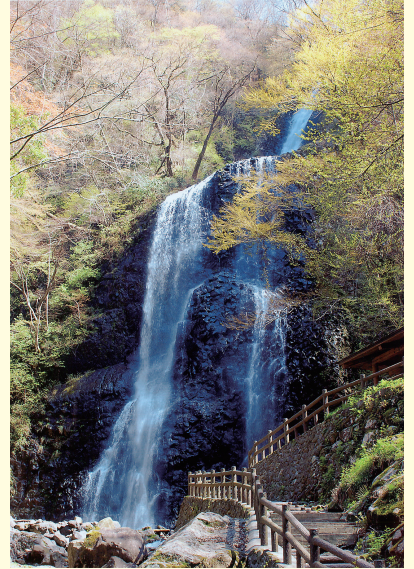


総合公園から松山城を臨む

中予地区3景

春から初夏にかけての中予地域の風景を写真に撮りました。

写真提供：河合 淳（昭和34年卒）



川内：白猪の滝

- 左：上林森林公園の「ヒマラヤの青いケシ」です。何とも言えない空色の花を被写体にシャッターを切りました。
- 中：松山市総合公園から撮った松山城を背景にした桜とツツジのコラボ写真です。私の好きな写真の1枚です。
- 右：厳冬、紅葉時期の白猪の滝も見応えがありますが、山桜を背景にした滝も見る価値があります。

文芸欄

三原色を使って

三原色（赤・青・黄）と白だけを使って、自分だけの色を作って描いています。野に咲く草花などの持つ美しさを発見し、心を揺さぶられ、愚直なまでにひたすら見つめて描いているうちに、それらの命の営み音さえ聞こえた気がしました。

原画提供：安井 明美（昭和48年卒）



アオスジアゲハ



ホタルブクロ



サルトリイバラ